

医学図書館の「杏仁醫館文庫」と医史学研究者岩熊哲について

相部, 久美子
九州大学附属図書館医学図書館閲覧係

<https://doi.org/10.15017/1523953>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2014/2015, pp. 19-29, 2015-08. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

報告

医学図書館の「杏仁醫館文庫」と 医史学研究者岩熊哲について

相部 久美子[†]

<抄録>

平成 26 年度に九州大学附属図書館医学図書館に「杏仁醫館文庫コーナー」を新設したのを契機に文庫旧所蔵者の「岩熊哲」と「杏仁醫館」, 「杏仁醫館文庫」について調査した。「岩熊哲」が「九大醫報」に 9 年間連載した「杏仁醫館隨筆」の記事の紹介と共に, 調査で判明した事項を報告する。

<キーワード> 岩熊哲, 杏仁醫館, 杏仁醫館文庫, 杏仁醫館隨筆, 九大醫報, 医史学, 吉雄耕牛, 呉文庫, 関場不二彦, 菅原翠洲, 福地神社

The Kyōnin Hospital Collection of Kyushu University Medical Library and Tōru Iwakuma (1899-1943)

AIBE Kumiko

1. はじめに

医学図書館が所蔵する「杏仁醫館文庫」は福岡県直方市出身で九州帝国大学医学部を昭和 2 年に卒業した医師「岩熊哲 (1899-1943)」の旧蔵書である。「岩熊哲」の経歴・業績に関しては, 記述されている資料が多いので¹⁻⁵, この稿では触れず, 今回の現地調査で判明した既存の履歴と異なる部分についてのみ後述する事にする。

彼は「九大醫報」に 9 年間にわたって「杏仁醫館隨筆」を連載した。遺稿となった最終回 (58) 「59 筆を絶つ」⁶ 中の一文が私の脳裏から離れなかった。『今, 私の許には医史学に関する図書や史料がかなり集まっている。十数年来, 時間と資力と体のゆるす限り熱心に蒐集したもので, 地方にいては之以上のことは出来まいと思うものである。中には, 非常に貴重な本もある。このコレクションをそのまま死蔵または散逸させるのは遺憾であるから, ぜひ九大医学部の適当なところに保存して, この方面に興味を持つものに開放し, 大いに利用してほしいものである。この図書の寄贈にあたって, 私の希望するところは唯つぎの二項につきる。(1) 本誌に長らく厄介になったこの隨筆に因んで, 「杏仁醫館文庫」という名称にしてほしい。(2) 将来, この文庫を中心として, 九大医学部に医史研究のさかんに興ることを切望している。(以下略)』

経緯は定かでないが, その蔵書は彼の死後一括して九州帝国大学医学部解剖学教室に所蔵された後, 2004 年に大半が医学図書館に移管された。医学図書館の中

では, 貴重図書室の「貴重古医書コレクション」⁷, 展示室, 3 階保存書庫の解剖学教室の棚等に分散されてしまい, 目録データに「文庫名」が入力されていない資料が多いので, 書籍を開いて蔵書印を確認しなければ「杏仁醫館文庫」と判らなくなってしまった。また未整理資料も多い。平成 26 年度に 3 階保存書庫の資料調査が行われたのを契機に, 「杏仁醫館文庫」を探し出し目録整理し, 同文庫コーナーを 3 階保存書庫 (図 1) と貴重図書室に設けた。



図 1 : 3 階保存書庫「杏仁醫館文庫」コーナー

[†] あいべくみこ 九州大学附属図書館医学図書館閲覧係 (〒812-8582 福岡市東区馬出 3 丁目 1-1) E-mail: aibe.kumiko.903@m.kyushu-u.ac.jp

2. 杏仁醫館文庫



図2:「杏仁醫館文庫」の蔵書印

2.1.文庫の入手経歴

岩熊哲自身は前述した遺稿⁶の中で、『寄贈図書は和漢洋の〇〇冊くらいで、その内容目録はつくる暇が無かったが(一部は図書カードができています)、その納入や整理や保存方法など、福岡医学史話会会長であられる平光吾一先生のご尽力を仰ぎたいと思っている。先生の指揮によって、私の希望通りことが運ぶように、切にねがっている。(会長は誤りだが原文のままにする)以下省略』と述べている。

岩熊哲は昭和18年4月15日に没したが、同年10月に九州大学医学部解剖学教室に、彼の文庫は引き継がれた。解剖学教室教授の平光吾一が彼の遺言を尊重したからだと思われる。

当時の図書原簿を調べると、「杏仁醫館文庫」の正確な冊数が判った。

3回に分けて「山内嘉兵衛」(福岡市千代町の山内書店)より購入されている。

昭和18年10月12日 和図書 237冊 (備品番号: 6431-6650)

昭和18年10月13日 洋書 116冊 (備品番号: 16641-16740)

昭和18年10月15日 和古書 644冊 (備品番号:

6651-6841)

購入金額は和書570円32銭、洋書422円30銭であった。なお10月12日に購入した和図書の内10冊は、疎開中紛失したため「昭和21年4月30日登録廃棄」されている。

当初は約1000冊受入れた資料の内、現存するのは何冊か、その調査・目録整備は平成27年度の研究課題としたい。

2.2.文庫の現状と内容

平成26年度に整理した222冊の「杏仁醫館文庫」(請求記号:「杏仁醫館文庫」//1-222)は、3階保存書庫の「杏仁醫館文庫コーナー」に211冊、貴重図書室の同文庫コーナーに11冊が配架され、その詳細事項は九大コレクションで検索できる。しかしこれ以外の「貴重古医書コレクション」に含まれている同文庫、及び展示室の同文庫に関しては、文庫名が入力されていないものもあるので、現存する正確な冊数は把握できていない。

既存の冊子目録として医史学者「三木栄(1903-1992)」が編集発行した「故岩熊哲旧蔵古医書目録並に編者小記」⁸がある。同目録には、洋書102冊、和書193冊が掲載されているが、九大コレクションで検索すると、和書は「貴重古医書コレクション」に含まれているものが多く、洋書は「貴重古医書コレクション」の中にも含まれているものもあれば、今回整理した中にもある。また不明資料と思われるが、検索できない図書もある。

「杏仁醫館文庫」222冊は九大コレクションの詳細検索で所在記号欄に、「杏仁醫館文庫」と入力すれば書誌の事項が表示される。これらの図書には岩熊哲が熟読した形跡が残されている。文章に赤・青色鉛筆で線が引かれ、補足説明、感想、覚書、単語の意味等が記入されている図書が多く見られる。図書の内容に関連のある新聞や辞典の切抜きを糊付けしたり、間違い箇所を赤鉛筆で添削したりしている。挟み込み資料が多いのも特徴である。師の眞島隆輔からの葉書きが2通、竹馬の友・修猷館英語教師「白井文彦」の返信葉書があったが、この葉書は岩熊の往信(単語の意味解釈の質問)への回答である。戦地部隊で救護班に属している人物からの葉書き(内容は論文送付への礼)、岩熊が戦地の友人に宛てた葉書が宛先不明で返送されている。検閲の押印が戦時下における通信の厳しさを示している。名刺や出版案内の葉書きの裏に原稿の下書きやメモが記載されている。

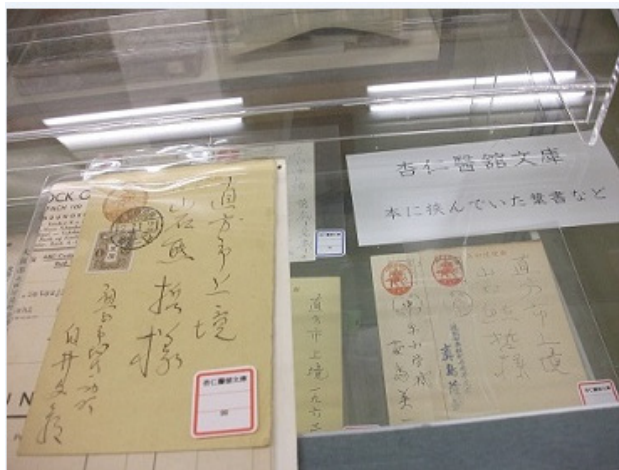


図3：本に挟まれていた葉書

2.3. 「吉雄耕牛纏帛法図巻」について

文庫の中で最後に整理した「吉雄耕牛纏帛法図巻」（「杏仁醫館文庫//222」）（図 8-13）の中にも岩熊のメモが残されていた。昭和 14 年 1 月 1 日付けの異動の挨拶状の裏に赤・青・黒鉛筆で英語，オランダ語等で単語が書き付けられている。図書の中のオランダ語の部分の翻訳を試みたのだろうか？岩熊がこの図書を入手した時期を推測した。昭和 14 年でないだろうか？ 図書には「杏仁醫館文庫」の蔵書印の他に「呉氏文庫」の蔵書印が押印されている。（図 9）「呉秀三」の旧蔵書である。

「杏仁醫館随筆その 35」（昭和 15 年 3 月稿）に次の文章がある。『知名な学者の旧蔵本が市場に現れて、散逸してゆく様を眺めるのは誠に寂しいものである。昨年は呉秀三博士や小川劍三郎博士の蔵書が，こういう運命にあって永久に分散して仕舞い，医史関係の人々に痛惜された。私も呉氏文庫や清節文庫の捺印ある和本を少しばかり蔵しているが，それを手にする度に落魄した偉人の末裔に遭った時のような無常を感じる』⁹

この本は図 7 枚のみで構成され，包帯の巻き方，医用器具などが淡彩色でスケッチされている。（図 10）題簽（図 8）には「吉雄耕牛纏帛法図巻 関場所蔵 全」と記載され，裏表紙裏の遊び紙に，横長縦半分の高さの紙が糊付けしてあり，紙（図 11）には「吉雄耕牛自家肖像及蘭字」，肖像画，オランダ語の文章がある。本に綴じられていないが，他に英文タイプ書きの紙 1 枚（図 12）と，墨書の和紙 1 枚（図 13）が挟まれていた。

英文の文字は「Hotai-no-maki. (Bandage). 1 Vol. Date unknown[ママ]. By Kogyu Yoshio. At the end of this book are found handwritings by the author himself.」とタイプされ，墨書に関しては，「菅原，原本，写」の文字

しか解読できないが，これを奥書と判断していいかどうか迷った。「吉雄耕牛」について調査すると，1 枚目の図は既に本館のホームページで公開され¹⁰，「ハイステルの『外科学』から抜粋された図版」と紹介されていた。ハイステルの『外科学』の英語訳版¹¹を医学図書館で所蔵していたので，英語版を見ると包帯の図（図 4）は 2 枚あったが，7 枚の図とは異なっている。ハイステルの『外科学』について解説された本も調べた。¹²

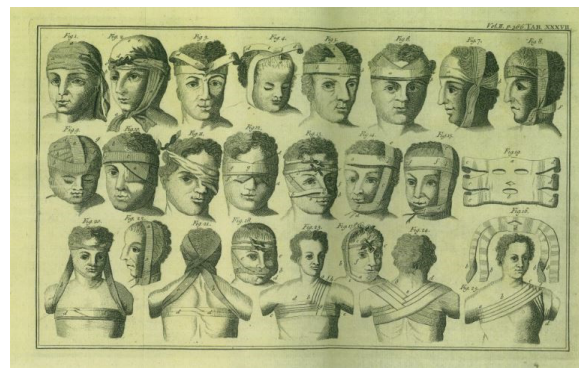


図4：ハイステル『外科学』英語版（1768）より

研究開発室参加職員達とこの本について調査すると疑問点が少しずつ払拭され，何とか目録登録した。推測の部分も多いが，今後の参考になればと思い過程を報告する。

まず題簽の「関場所蔵」は「関場不二彦所蔵」とであると推測した。関場不二彦の「西醫學東漸史話」（杏仁醫館文庫//168）に吉雄耕牛の項があり，関場所蔵の「包帯図巻」について記述し¹³，記述の横に添付されている「吉雄耕牛自画像並包帯巻之書後（蘭文）」の図が岩熊哲所蔵本に糊付けされている紙の図と同じだからである。ただし岩熊所蔵本には右端に「吉雄耕牛自家肖像及蘭字」の文字が追加されているので，同一本ではなく，関場所蔵本の模写であると推測した。次に墨書部分については，「菅原翠洲臨摹... 原本前之写」と解読し，奥書とみなし，日本画家の「菅原翠洲」が模写したと解釈した。「関場不二彦（関場理堂）1865-1939」は東京大学医学部在学時に「呉秀三（1865-1932）」と同級であり，共に医学及び医史研究の道を志した友人関係にある¹⁴⁻¹⁵。関場は後に北海道で外科医，医史学者，アイヌ研究者として活躍した。同じ北海道で北海道師範学校の教師として日本画普及に努めた「菅原翠洲（1874-1931）」に模写を依頼した可能性は十分にある。以上の理由で「関場不二彦が（友人の呉秀三に贈る為に？）菅原翠洲に関場所蔵図書の模写を依頼して，模写作品が呉秀三の所蔵となり，その後岩熊哲が入手したのではないだろうか」と推測をした。

3. 岩熊哲と杏仁醫館：「杏仁醫館隨筆」の中から

彼の医史学における偉業を讃える資料は数多く見られるが、杏仁醫館について具体的に記載された資料は見つからなかった。生前に彼から遺言を託された平光吾一は「杏仁醫館隨筆」の最終稿の「付記」で、岩熊哲死後に届いた遺言書を見て、岩熊邸を訪問した際の様子を記述しているが、仏間、庭、書斎の描写にとどまり、『岩熊哲君の委しい追憶談とか、医史学上の功績とかについては又別に書くことにしたい。』としている¹⁶。以後岩熊について記述する機会はなかったようである。

「杏仁醫館隨筆」は、東洋・西洋の医史学に関する論文で多くを占められるが、(その二)、(その十)、(その二五)、(その三五)、(その四三)、(その五十五)は、エッセイ風な読み物となっている。読者の好評を博し、編集者からの要望を受けたからだが、エッセイの最初は必ず遠慮がちに断り書き『こんなもので紙面を潰して』から始まる。エッセイの中に杏仁醫館の主の様子が垣間見える。

家人が外出している間、門を閉じ読書する長閑な日もあれば¹⁷、子供の頃から親しんでいた老樹の楊梅が台風で倒れ、悲しみながら樹木の生命について考え、切り倒して根元だけ残して中を剝らせて火鉢をつくろうと思う日もある¹⁸。欲しい本を見出した夢をみる癖があるので、実際に古典即売会でポンペ著薬物書(図5)に遭遇した時には、また夢かと思ったと書いている¹⁹。彼の若い頃からのモットーは、『精神生活の最大限。物質生活の最小限。が然し、家をもち子をもち病をもつと、周囲がなかなか素志を貫かせてくれない。あまり固守すれば「やせ我慢」にされて仕舞う』。²⁰

彼の読書には四季のパターンがあった。夏は語学や文芸物等の余り頭を使う必要のない本、秋は科学的なもの、冬は思索的、哲学的なもの²¹という風に、衣替えと同様扱いされている。



図5：ポンペ薬物書（同書に関しては[34]が詳しい）

岩熊哲は学生の要望に応じて講演会の代わりに、「杏仁醫館隨筆」に「吾等は醫史より何を学ぶべきか」のタイトルで2回に分けて長文を載せている²²⁻²³。学生が理解し易い、興味を抱かせるような用例を挙げながら熱い想いを伝えている。その想いは伝わっていたようである。卒業生の一人が「岩熊哲先生を偲ぶ」のタイトルで、小野寺内科の開講記念日における岩熊哲の講演に感心を抱いたと書いている²⁴。

昭和初期の九大医学部の医学史の授業は「富士川游(1865-1940)」が行っている。「杏仁醫館隨筆」で、岩熊哲はこのように述べている。『わが学部では数年ごとに斯界の権威なる富士川游博士を聘して、医学史の課外講筵が開かれ、随意科目とはいへ多くの聴講者をひきつけて居るから[中略]筆者も十年前には此の時間の熱心な聴講人であって、一日たりとも闕がしたことはなかった。当時の感想を率直に表すことを許されるならば、富士川先生の講義はその得意とせらるる東洋醫史に傾き過ぎ、西洋醫史を等閑にされるのを遺憾と思っただけである。』²⁵

彼の医史学研究、書籍を通じての交流の幅はひろい。上京の際は医史学者「小川政修(1875-1952)」、寄生虫学者「宮入慶之助(1865-1946)」を訪ね歓談している²⁶⁻²⁷。師と仰ぐ医史学者「眞島隆輔」からは頻りに書籍を借用し、感謝の意を述べている。

『ヒポクラテス研究の権威眞島隆輔先生へ、心からの感謝を捧げねばならぬ。先生はその所蔵にかかる豊富なヒポクラテス文献の自由な使用をゆるされたが、筆者が望むままにご老体を幾度も書庫に運ばれて、所要の図書をその都度に提供下された好意を思う時は今でも感激に堪えない。先生の指導と徳憑なかりせば、この一編は恐らく生まれなかったであろう。』²⁸

4. 直方市を訪ねて

「福智山」の山麓に直方市永満寺地区がある。周りには、「福智山麓花公園」、「高取焼永満寺窯」、「もみじの森」などがあり風光明美な静かな山里である。杏仁醫館調査のための直方市訪問に際し、岩熊哲が校医をしていた永満寺地区にある「福地小学校」と、「もみじの森」周辺を一番の調査候補地に入れた。しかし杏仁醫館文庫の図書に挟まれていた岩熊哲宛の葉書き及び著書「ヒポクラテスへの回帰」²⁹に記載されている彼の住所は「直方市上境 1963」である。上境には地図を見ると「福地神社」がある。神社には何か歴史的な手がかかりになる物が残っているかも知れない。

4.1. 福智神社

2015年5月16日に直方市を訪れた。

直方市立図書館の郷土史コーナーの棚で見つけた郷土史書籍の中の一冊が目にとまった。『先生には愛らしい女の子が一人おられました。現在直方市の中学校で教師をされています。』³⁰平光吾一の〔附記〕に描かれている「岩熊千束」氏が直方市に居住しているのでは？直方市立図書館での資料確認を終えて、「福地神社」から東方に3キロ離れたところにある「福地小学校」と、「もみじの森」に向かった。両地域での調査は捗りしかなかったが、上境にある「福地神社」について尋ねると、神社の場所、伊藤宮司の住居を丁寧に教えてくれた。「福地神社」のすぐ傍を、田川直方バイパスが通っているが、境内は竹林に囲まれ静寂である。このバイパス建設のため昭和41年に行われた発掘調査で、境内からは弥生時代後期から終末期に作られたと見られる箱式石棺などが出土された。出土品は水町遺跡公園で保存されている³¹が、境内に青いビニールシートで覆われているのは、遺跡だと思われた。福地神社参道には長い石段があり下段から最上段に伸びる手摺が中央に備え付けられている。(図6)最上段の3段下の石段の左側に石碑(図7)があり、手摺寄進者名が彫られていた。「千束」の文字を見て姓は異なるが岩熊哲の息女だと確信した。この日は時間が無くなったので、神社と手摺、石碑の写真を撮影して終了した。



図6：福地神社手摺



図7：福地神社手摺石碑

帰宅後、福地神社の住所を調べたら「直方市上境1963」で、岩熊哲の住所と同じだった。

「杏仁醫館」は「福地神社」にあったのだろうか？神仏には関心が無いと岩熊哲は書いている。私は以前コピーしていた資料を再読した。昭和15年に「直方の三代目医家」の調査が行われ当時三代続いた医家が3家あり「岩熊家」が筆頭に挙げられている。「岩熊家」についての報告者名は三代目の「岩熊哲」である。現代(岩熊哲)の診療所所在地は「直方市上境1963」昭和7年10月継承。先代は「岩熊則之」、現代の実父であり、明治36年継承。先々代は「岩熊斉一」、先代の養父であり、明治7年頃開業している。住所は3代にわたって同一である。先々代の略歴に『代々福地神社宮司なりしが此ノ代より医業に転ズ、占部三折氏ニ漢医方ヲ学ビ京都順正書院ニ蘭医ヲ学ブ。』³²岩熊哲と福地神社のつながりはわかったが、2点の疑問が残る。

「福地神社」の境内、参道など周囲を何度も歩いたが、病院らしき痕跡はなかった。病院は「福地神社」に本当にあったのだろうか。もう1点は「岩熊哲」の父親の名前である。調査したどの資料にも経歴には、父の名前は「岩熊哲司」と記載されている。私が整理した「杏仁醫館文庫」の本には、「Tetsuji Iwaguma」、「岩熊哲司」宛の葉書き、封書が多数挟まれていた。大半は海外も含めて出版社、薬品会社からの商品注文に関する連絡である。私は岩熊哲が本名とは別の名前も使用していたのではないだろうかと推測していた。

4.2. 杏仁醫館跡

1週間後に福地神社の伊藤宮司邸を訪れた。伊藤宮司の御祖母から岩熊哲の息女「小川千束」氏の近況と、住居をご教示頂いた。住居は福地神社から近かった。近隣では「ちづかさん」の愛称で呼ばれている。

「小川」邸を訪問すると、突然の訪問にも関わらず邸内に快く招いて下さり詳しいお話を伺う事ができた。その内容に、後日電話で確認した内容を合わせて、所々筆者の解説を交えて以下に記す。[]は筆者の補足説明である。

私の最初の質問に対して「ここが杏仁醫館です」と答えられ、病院があった場所を指された。

広い敷地内には邸宅と別に生垣で囲まれた広い空き地があり、石碑(図14)と、灯籠が立っている。「千束」氏の説明が始まった。その空き地にかつて杏仁醫館はあった。病院の正式名称は「岩熊医院」で病院の入口に看板があり、病院の名前の横に「内科医」と書かれていた。病院の建物は「コ」の字形で、診察室の他に患者が横になるための病室があった。遠方からの患者もいた。入院設備はなかった。医師は岩熊哲1人。[「杏仁醫館随筆(その43)」によると昭和15年夏よ

り代診の医師がいたようである¹⁷⁾、看護婦は2人、岩熊哲1人で往診もするので、患者が来たら診るし、診療時間は厳格には定まってない。昔の病院はそれが普通だった。岩熊哲は自転車に乗り赤池(福地町)、上野方面まで往診に行っていた。[坂の多い地域である]岩熊哲没後はその後を引き継いで九大から西沢先生が住み込みで5年間近く代診した。家族が住む家は病院とは別の建物だった。

現在の4年前に新築された家は、階段、柱、引き戸等、年代的価値がある建材は昔のまま残されているが、現代の建築と調和されていて、違和感が無い。邸内の部屋数は多く、私が案内された部屋はどの部屋も庭が見えた。岩熊哲の書斎は「千束」氏のお孫さんの子供部屋になっている。書斎の窓から見える新緑の樹木の葉は、涼しげに風に揺れていた。昔から洋間でしたかと質問すると、父は病気だったので、原稿を書いている途中に具合が悪くなったらすぐに横になれるよう布団を敷いていたので、和室でしたと返答された。

「小川千束」氏は岩熊哲没後、母、祖母と3人暮らしで、[語学堪能な岩熊の血を受け継いで]中学校の英語教師を長年勤めた。薬剤師の小川氏と結婚後、姓は変わったが、80歳の現在まで生家を離れた事がない。[杏仁醫館を守って来られた。]

「千束(ちづか)」の名前は、岩熊哲が豊前の「千束村」に講演で訪れた際、村人達の歓待を受け、その心遣いに感動して命名した。昭和12年生の妹「柏(かしわ)」、昭和14年生の弟「翼(つばさ)」がいたが、二人とも幼少時に亡くなった。「柏」の名前の由来は岩熊が第五高等学校出身で、校章の「柏の葉」にある。「翼」の命名については千束氏が岩熊が飛行機に乗った時に思いついたと話した。[「杏仁醫館随筆(その二十五)」に上京の帰路に飛行機に乗った時の情景を丹念に描いている。『飛行将校であった叔父の葬送行を、銀翼の旅で結ぶのも意味深いと考えて帰りは空路を選んだ[中略](銀翼の旅、十月五日)』³³⁾叔父への哀悼の思いも込めて「翼」と命名したのだろう。「翼」の誕生は翌年である。]

岩熊哲の父親の名前は、「岩熊則之」で、「岩熊哲司」は「岩熊哲」が使用していた名前で、印鑑を押すのを何度も見た。

私の質問に「千束」氏は丁寧に答えて下さった。訪問の最後に仏間に案内頂いて、岩熊哲の仏前に「杏仁醫館文庫」整理を報告した。邸宅から田を隔てた竹林の傍にある岩熊家の墓地に行き墓参り(図16)をし、「千束」氏に見送られ帰途についた。

数日後「筑前国鞍手郡永満寺村むかしものがたり」の著者、直方郷土研究会会長の「篠原義一」氏にお会いした。篠原氏の父親「高島治見」氏は岩熊哲と小学

校の同級生であった。篠原氏は「岩熊医院」が取り壊される前の写真(平成2年9月2日撮影)を撮影されていた。(図15)「岩熊哲」については次のことを話された。岩熊先生の病気が悪くなってからは病院も休診していたが、幼い篠原さんが病気になった時に父親が岩熊医院に篠原さんを連れていったら、岩熊先生ご自身も布団に伏せていたが、枕元で診察して注射して下さった。

5. おわりに

医史学研究的存続を後世に託した岩熊哲が逝去して72年が過ぎた。故郷の地でも今ではその存在を知る人は少ない。「杏仁醫館文庫」が1人でも多くの学生の目に留まり、利用される事を願う。医学図書館には福岡医科大学、九州帝国大学で学んだ学生・教員の旧所蔵文庫が未整理で残っている。個々の文庫には旧所蔵者の歴史が刻まれ、その歴史は九州大学の歴史を知る事にも繋がる。配架スペースの問題もあるが、大切に継承しなければいけないと思う。

6. 謝辞

小川千束氏は岩熊哲に関する貴重な情報を丁寧にご教示下さいました。心よりお礼申し上げます。また篠原義一氏はご自身が撮影された岩熊医院の写真の撮影をご許可頂きました。感謝申し上げます。直方市立図書館の小山氏、郷土資料室の職員の方には史料調査でお世話になりました。ありがとうございます。研究開発室室員のミヒエル先生のご指導に感謝申し上げます。同じメンバーの方々と意見・情報を交わしながら楽しく仕事ができました。感謝いたします。最後に医学図書館の図書館専門員始め職員の方々にも感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 故岩熊哲、醫史學論考、pp. 326-332、米山千代子、1943.
- [2] 直方市医師会、“2『医史学論考』の著者岩熊哲”、直方市医師会の歩み、pp. 97-102、Mar. 1982.
- [3] 佐藤裕、“独学独行の在野医史学家 岩熊哲”、福岡県医報、no. 1262、pp. 16-17、Apr. 1998.
- [4] 佐藤裕、“九州における医史学研究的系譜(1) 岩熊哲の業績とその医史学観について”、日本医史学雑誌、vol. 45、no. 2、pp. 218-219、Apr. 1999.
- [5] 山田英智、“医史学者岩熊哲”、学士鍋、no. 160、pp. 42-44、Sept. 2011.
- [6] 岩熊哲、“59. 筆を絶つ”、九大醫報、vol. 17、no. 5、pp. 3-4、May 1943.
- [7] 九州大学附属図書館医学分館貴重古医書コレクション、
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp_db_f/igaku/index_jp.html

- [8] 三木栄編, “故岩熊哲旧蔵古医書目録並に編者小記”, 三木栄, [1959].
- [9] 岩熊哲, “41. 長閑な観照”, 九大醫報, vol. 14, no. 5, pp. 17, May 1943.
- [10] “ハイステルの『外科学』から抜粋された図版”
https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/hp_db_f/igaku/exhibitions/2007/exhib2.htm
- [11] Laurence Heister, *A general system of Surgery, in three parts ...*, London, J. Whiston, 1768. (医学図書館貴重図書室配架: WO/H 473/1-3/1768/貴重)
- [12] 阿知波五郎, “ハイステル挿絵の意義”, 近代日本外科学の成立: わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響, pp. 96-113, 日本医史学会, Feb. 1967.
- [13] 関場不二彦, 『西医学東漸史話』, 上巻, pp. 429-430, 吐鳳堂書店, Jan. 1933.
- [14] 富士川游, “故医学博士呉秀三君”, 科学随筆医史叢談, pp. 25-251, 書物展望社, Dec. 1942.
- [15] 富士川游, “歴史学者としての関場理堂博士”, 科学随筆医史叢談, pp. 252-258, 書物展望社, Dec. 1942.
- [16] 平光吾一, “59. 筆を絶つ[附記]”, 九大醫報, vol. 17, no. 5, pp. 4-5, May 1943.
- [17] 岩熊哲, “48. 石榴の核”, 九大醫報, vol. 15, no. 1, pp. 19, Jan. 1941.
- [18] 岩熊哲, “56. 無花果の葉ずれ, 4. 老樹仆る”, 九大醫報, vol. 16, no. 2, pp. 23-25, Feb. 1942.
- [19] 岩熊哲, “35. 出島版ポンペ著薬物学書に就いて”, 九大醫報, vol. 13, no. 4, pp. 26, July 1939.
- [20] 岩熊哲, “41. 長閑な観照”, 九大醫報, vol. 14, no. 5, pp. 13-14, May 1943.
- [21] 岩熊哲 “56. 無花果の葉ずれ, 3. ブルターク再読”, 九大醫報, vol. 16, no. 2, pp. 22, Feb. 1942.
- [22] 岩熊哲, “54. 吾等は医史より何を学ぶべきか”, 九大醫報, vol. 15, no. 10, pp. 12-19, Oct. 1941.
- [23] 岩熊哲, “54. 吾等は医史より何を学ぶべきか”, 九大醫報, vol. 15, no. 11, pp. 11-18, Nov. 1941.
- [24] 山県泰, “岩熊哲先生を偲ぶ”, 九大醫報, vol. 35, no. 4, pp. 11-13, Oct. 1965.
- [25] 岩熊哲, “22. 医史学の研究に就いて”, 九大醫報, vol. 11, no. 3, pp. 36, June 1937.
- [26] 岩熊哲, “16. 旧友と旧師と旧跡と”, 九大醫報, vol. 10, no. 3, pp. 44, June 1936.
- [27] 岩熊哲, “56. 無花果の葉ずれ, 1. 宮入先生の近況”, 九大醫報, vol. 16, no. 2, pp. 20-21, Feb. 1942.
- [28] 岩熊哲, “ヒポクラテスへの回帰”, 九大醫報, vol. 13, no. 2, pp. 53, Apr. 1939.
- [29] 岩熊哲, ヒポクラテスへの回帰, 日清書院, Nov. 1941.
- [30] 篠原義一, “4. 内科医・岩熊哲先生”, 筑前国鞍手郡永満寺村むかしものがたり, Aug. 1991.
- [31] 水町遺跡公園古墳めぐりウォーキング
http://kofunmeguriwalking.web.fc2.com/mizumachiisekiko_uen.html
- [32] 岩熊哲, “4. 三代続いた医家報告書, 直方の三代目医家. イ. 岩熊家”, 直方市医師会の歩み, pp. 106, Mar. 1982.
- [33] 岩熊哲, “31. 観臓碑を訪ふ. 4”, 九大醫報, vol. 12, no. 6, pp. 49-52, Dec. 1938.
- [34] 大島明秀, “(乙) 医学分館所蔵の出島版ポンペ著書について”, 九州大学附属図書館研究開発室年報 2004/2005, p.p. 33-35, June 2005.
<http://hdl.handle.net/2324/3283>

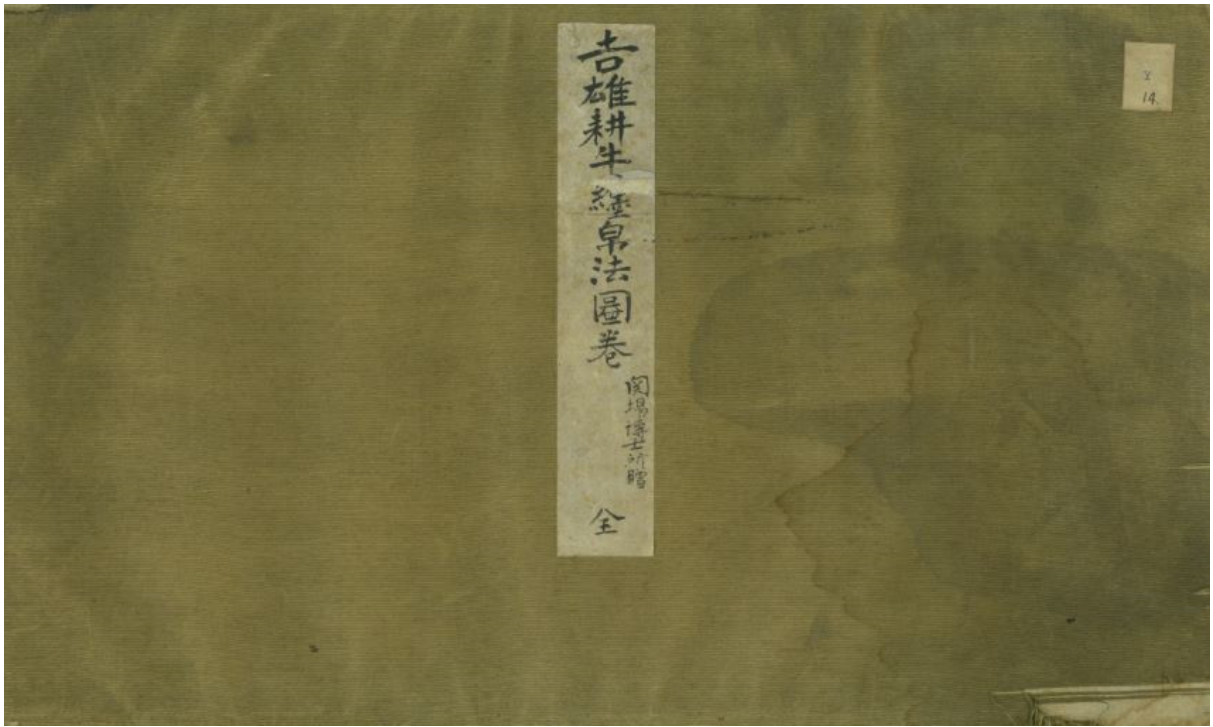


図8：「吉雄耕牛纏帛法図巻」表表紙



図9：「吉雄耕牛纏帛法図巻」裏表紙裏



图 10 : 「吉雄耕牛纏帛法図卷」 図[1]

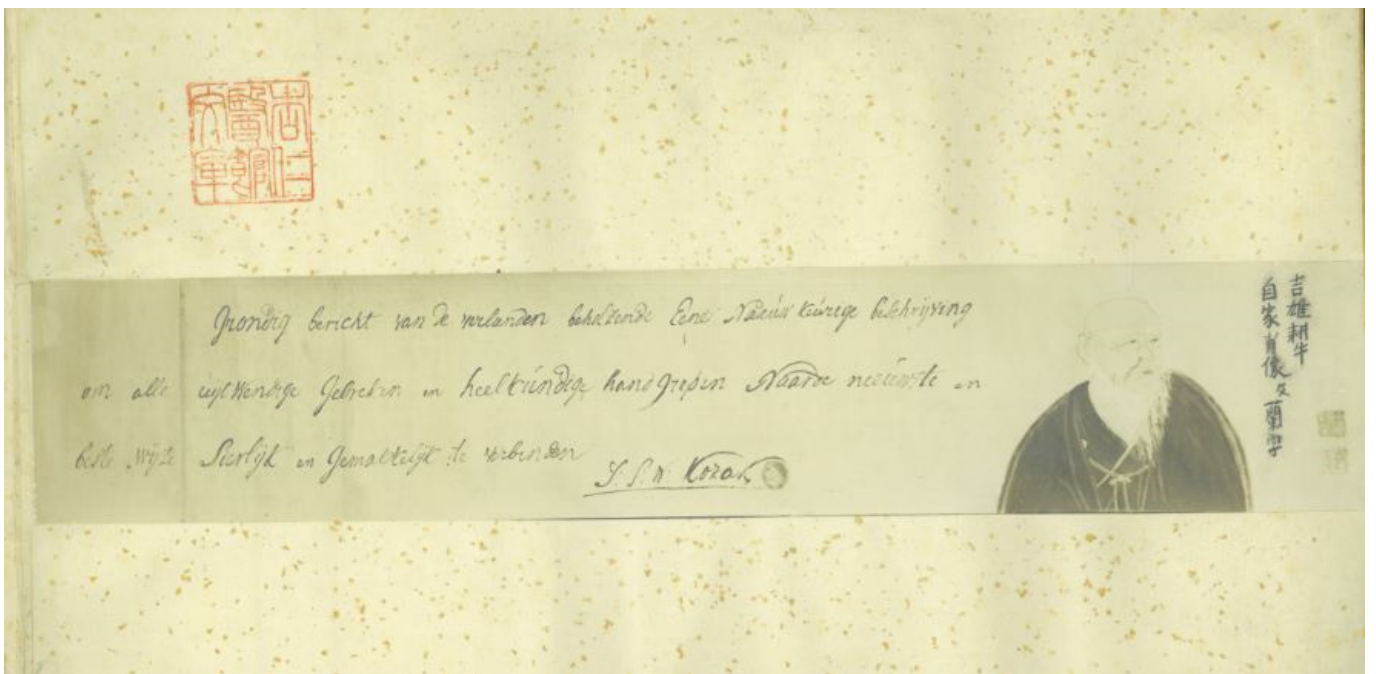


图 11 : 「吉雄耕牛纏帛法図卷」 裏表紙裏遊び紙

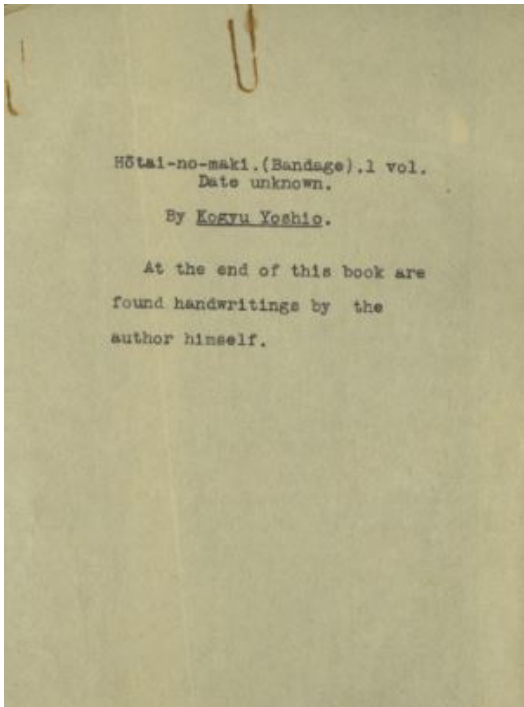


図 12 : 「吉雄耕牛纏帛法図巻」添付メモ

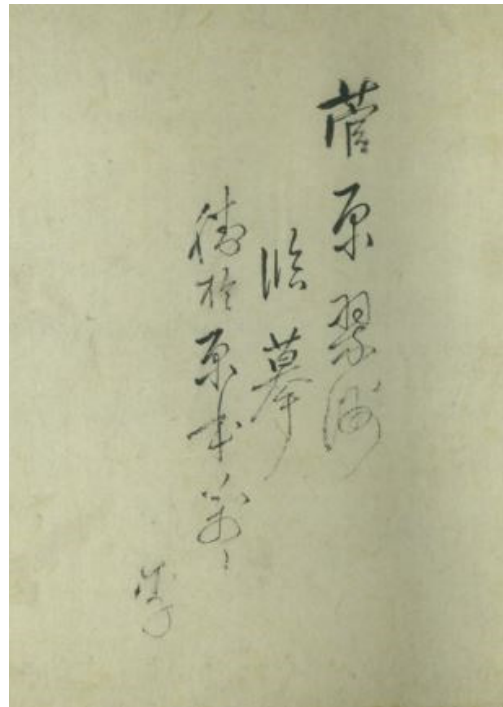


図 13 : 「吉雄耕牛纏帛法図巻」奥書



図 14 : 杏仁醫館跡石碑

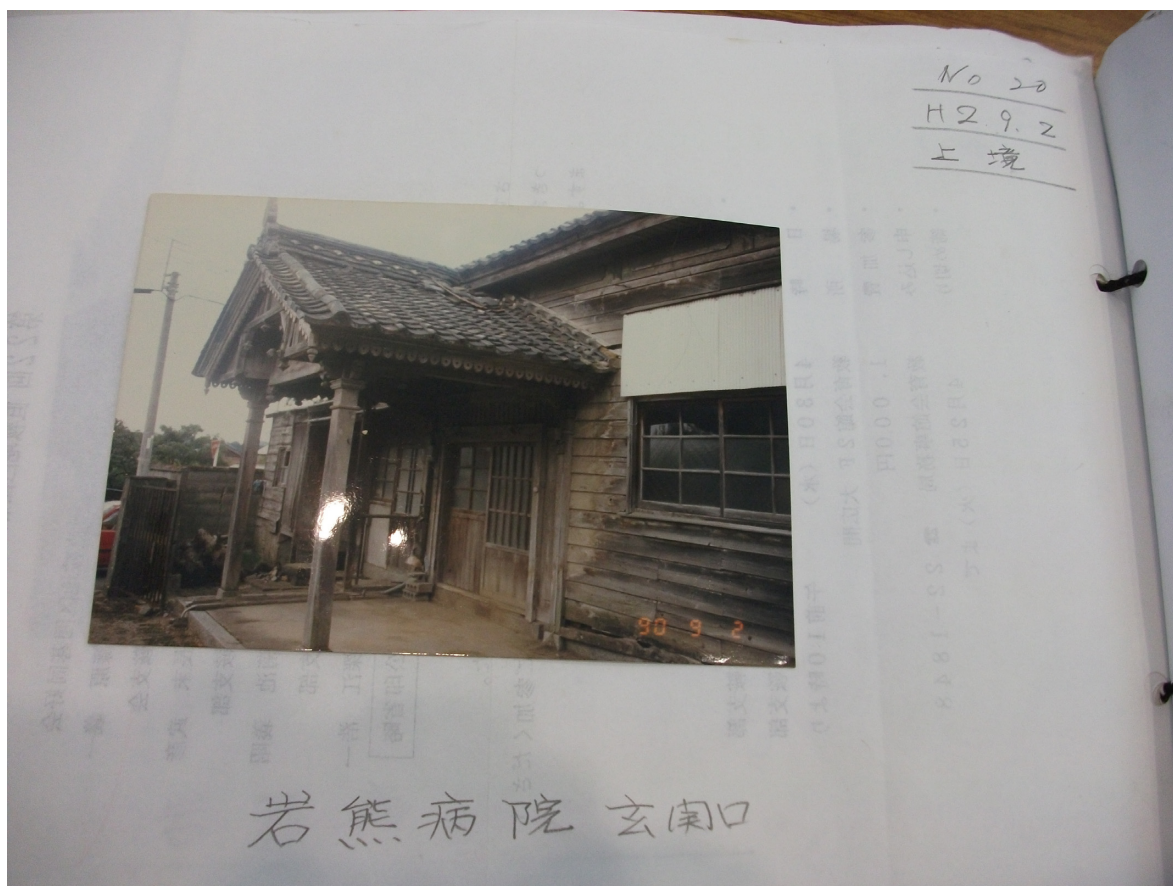


図 15 : 岩熊医院 (篠原義一氏撮影)



図 16 : 岩熊哲の墓